

## 高齢者の憩いの場、障害者雇用支援



「ゆっくりしていいね」。客に声をかける「地域食堂きずな」の門馬代表(右)。子供連れも多い

# 地域食堂 心も満たす

食を通じたまちづくりなどを目指した「コミュニティレストラン(コミレス)」が、道内各地で誕生している。地場食材を使った料理を安価で提供しながら、高齢者の居場所づくりや障害者雇用支援、地域活動の拠点整備など多様な役割を担っており、市民の人気も高まっている。

(札幌圏部 郡義之、写真部 諸橋弘平)

「いらっしゃいませ」。石狩市花川南の閑静な住宅街にある一軒家からにぎやかな声が響く。昨年十月に開店した「地域食堂きずな」。市内のNPO法人主催のコミレス開業講座を受講した、市内の二十代～六十代の女性八人が運営する。店舗はそのうちの一人が購入した中古住宅を改装した。午前十一時から午後四時までの営業時間中、近所の主婦や高齢者が絶えず来店し、約二十席はいつも満杯状態だ。

食事は市内の飲食店主や主婦ら十一人が日替わりで提供する。例えばある日はカフェテリア方式。サバのみそ煮に野菜の煮物、数の子、卵焼き、ふろふき大根、ご飯とみそ汁を選んで七百円と充実している。地元食材を使ったカレーやそばなども。調理する側は一日六千円(冬季五百円増し)の店舗賃料をき



## 市民「元気もらえる」

ずなを支払い、差し引き分が収入となる。石狩に住んで二十年になる無職男性(60)は「ここに来れば、地域の情報も得られるし、元気をもらえる」と話す。経費を払えば、利益はほとんどないが「きずな」の門馬富士子代表は「来店した人を一人にせず、必ずこちらから話しかける。目指すは石狩の地域づくり」と力を込める。コミレスは、NPO 研修・情報センター(東京)が一九九八年、NPO法人の新ビジネスモデルとして提唱。道内には札幌や釧路など少なくとも十カ所ある。不登校の子供の支援や観光振興など、地域の実情に合わせた形で運営する所もある。

今年八月に開店した石狩管内当別町の「共生型地域オープンサロン」は、障害者雇用に力を入れる。現在、町内の知的障害者ら七人がドーナツ作りや接客に当たる。人とうまく接することができなかった障害者が、仕事を通じて次第に社会的になった例も。運営する町内のNPO法人「ゆうゆう24」は雇用をさらに増やす考えだ。

北海学園大の菅原浩信准教授は、コミレスが支持される要因の一つとして地域の疲弊を挙げる。「人口減や経済不況などで生活に不安を抱える人が増えている。コミレスにはお金に換えられない、心を満たすものがあるのだから」と話す。



ドーナツやクッキー作りに取り組み「共生型地域オープンサロン」のスタッフたち